

保育者養成課程におけるエピソード記述の実践

保育実践の言語化の意味を考える

Practicing the Episodic Recording Method in the Training Course of Kindergarten Teachers and Child Care Workers The Meaning of Reflections Expressed in Writing and by Narrative

児 玉 理 紗

Risa KODAMA

キーワード：教育方法論・エピソード記述・保育記録・言語化

I. はじめに

保育者が日々の保育実践を言語化していくことは、保育の質や保育者の専門性向上のために重要なものである。保育者養成校においても学生は実習日誌で保育実践を言語化する経験をもつが、何を書けばよいか分からないという不安や、書き方が分からないなどの悩みを抱えている。また、そもそも書くということに苦手意識を持っている学生もおり、特に最初の実習では実習日誌の記入に多くの時間を費やしている。その結果、日誌を書くということに対して面倒、時間がかかる、好きではないというネガティブな感情を持つ学生も少なくない。

そこで本実践では、「教育方法論」授業内で、鯨岡^{1) 2) 3)}のエピソード記述法を用い、実習での経験を言語化することを試みた。これまでの保育記録は「〇〇ちゃんが～をした」という行為や発話などの客観的な事実を描くことが求められてきた⁴⁾。しかし客観的な実践記録からはそのときその瞬間の子どもの姿や保育者の思いは浮かび上がってこない。エピソード記述は、他の誰でもない「私」の経験を、その時の主観的な思いや感情も交えて記述していくものである。このエピソード記述は実践記録として、実践者が保育を捉え直す手段と、質的研究の方法論の2つの可能性を示唆してきた⁵⁾。本実践はエピソード記述を前者の保育実践を捉え直す手段として捉え、学生が自身の保育を「私」という主観的な思いを入れてエピソード記述を作成することで、自分の保育を振り返り新たな気づきを得ることを目指したものである。

II. 実践報告

1. 概要

本実践は2年次前期開講科目である「教育方法論」において行ったものである。「教育方法論」は幼稚園教諭2種免許取得に必要な教職に関する科目であり、保育士資格取得に必要な選択必修科目でもある。「教育方法論」全15回の内2回を使いエピソード記述の実践を行った。実践のねらい、具体的な流れについては表1に示す。

表 1

1 回目

〈ねらい〉

- ・ 保育記録の重要性について知る。
- ・ エピソード記述の理論的な背景や書き方について理解する。
- ・ 実際に自らの実習における経験からエピソード記述の作成に取り組む。

〈実践の流れ〉

- ・ (前回の授業時に印象に残っている実習でのエピソードについて思い出してもらう)
- ・ 保育記録の重要性についての講義
- ・ エピソード記述について事例を紹介し、理論的な背景や書き方について説明する。特に自分が経験したことをあるがままに描くこと、「私」の思いや感情を入れて書くという点がエピソード記録の特徴であることを伝える。
- ・ これまでの実習の中で一番印象に残っていることについて、〈背景〉〈エピソード〉〈考察〉に分けてエピソード記述を書くよう伝える。
- ・ 授業終了後、学生が書いたエピソード記述を読み、コメントを記入する。特に「自分自身の思いが描かれているか」という点に着目し、コメントを入れる。

2 回目

〈ねらい〉

- ・ 自身のエピソード記述が読み手にどのように伝わっているのかを知る。
- ・ 他者からのコメントを参考にし、もう一度実践を振り返り、再度エピソード記述の作成に取り組む。

〈実践の流れ〉

- ・ コメントを記入したエピソード記述を返却し、数人の学生と交換し読み合う。
- ・ 教員からのコメントや他学生からの指摘を踏まえ、再度エピソード記述を作成する。

1 回目の授業では、客観的な事実が羅列された記録と、エピソード記述の両方を紹介し、特に「私」の思いや感情を入れて書くことを強調して学生に伝えた。また、2 回目の授業では実際に自分が書いた記録を他の人に読んでもらうという経験をすることで、読み手に自分の経験が分かってもらうように書くということにも意識するよう指導した。

2. 学生のエピソード記述

2 回の記述を経て多くの学生が印象に残っている実習でのエピソードを自分自身の思いとともに描いた。以下に学生のエピソード記述を 3 つ紹介する。

(1) 心の動きをありのままに描く

エピソード 1

タイトル：子どもたちの挑戦

〈背景〉

保育実習のとき、年長クラスでは鉄棒が流行していた。鉄棒が得意な子どもが前回りや逆上がりをするスルスルとこなしている中、逆上がりに何度も挑戦している A ちゃんがいた。

〈エピソード〉

私は、鉄棒の所へ行き、鉄棒を練習している子どものサポートをしながらAちゃんの様子を見守っていた。鉄棒が得意な友達が逆上がりをなんなくこなしている姿を見て、Aちゃんはとても悔しそうに友達を見て、もう一度自分も挑戦してみるが失敗…。私はAちゃんに「お尻をもとうか？」と聞いたが、Aちゃんは「いい、自分でやるもん」と言って、逆上がりに何度も挑戦していたが、あと一步の所で出来ない…。するとそこへ仲良しのBちゃんが来て「Aちゃん足をもっとね…」と言ってAちゃんにお手本を見せた。

AちゃんはBちゃんに言われた通りにすると成功しそうな所まで出来た。Bちゃんが「あと少し、あと少し!!!」とAちゃんを応援していた。私もBちゃんと一緒に、「頑張れ!」と応援した。Aちゃんもその声援に応じるように、何度も逆上がりに挑戦した。そしてついにAちゃんが逆上がりに成功したとき、Aちゃんはもちろん、周りの子どもたちも自分のように「やった! やった!」と喜んでいて、私が「Aちゃんあきらめず頑張って、出来て良かったね」と声をかけると、①満面の笑みで「えへへ。」と言った。

〈考察〉

何度も挑戦するAちゃんを見て、手を貸そうとしたけれどAちゃんは、“自分の力で頑張りたい”という思いがあったと思う。私は、その思いを受け止めて見守ることにしたがBちゃんのようにお手本を見せるということが出来なかった。Bちゃん自身も自分が出来なかった頃の経験があるから、Aちゃんの思いがとても分かっているんだと思い子どもから学ぶ部分があった。友達のために何かしようというBちゃんの気持ちやそれに応えようとするAちゃんの手がとてつと伝わった。そして、頑張っている友達を見て「応援しよう!!」と思う子どもがたくさんいて、②友達が成功したときには、喜びを共有し合っている子どもたちにとてつと感動した。最後のAちゃんの「えへへ」という笑顔からは、“嬉しいな”という気持ちがとてつと伝わってきた。私は子どもが何かに行きづまっているとき、すぐに保育者が手を貸すのではなく、あきらめずに挑戦する子どもの気持ちを大切にすることや、その挑戦を周りが見守り、サポートしていくことが大切だと思った。

エピソード1では、Aちゃんが逆上がりを成功するまでの過程がとてつといきいきと描かれており、読み手側も思わず一緒に応援したくなるような記述である。友達が成功させている逆上がりが出来ないという悔しい気持ちから挑戦し、周りの応援に応えるように何度も繰り返すAちゃんの思い。また、何とかAちゃんに成功してほしいとお手本を見せながら必死に応援するBちゃんや、Aちゃんの成功に思わず自分のことのように喜ぶ他の子どもたちの姿が目につくようである。下線部①の「満面の笑みで「えへへ。」と言った」という部分からは、読み手側もAちゃんが成功できたことに喜びを感じ安堵する。また下線部②の「友達が成功したときには、喜びを共有し合っている子どもたちにとてつと感動した。」からは、学生が子どもたちの姿に強く心を動かされたことが伝わってくる。

このような、Aちゃんをはじめとする子どもたちの姿が、読み手もそこにいたかのようにリアルに伝わってくるような記述は、まさに書き手である学生が子どもの心の動きとともに自分自身が心を強く揺さぶられたさまをありのままに描いたからだろう。

(2)「私」の心の動きに向き合う

エピソード 2

タイトル：ごっこ遊び

〈背景〉

幼稚園の5歳児クラスの中に、将来アイドルになりたいという夢を持つDちゃんという女の子がいた。Dちゃんは「上手にまわれるよ！ほらね。」と言いながら目の前でかわいく回って見せてくれたり、アイドルになりきったりと、一人で遊ぶことが多い女の子だった。

〈エピソード〉

ある日朝の好きな遊びの時間に、クラスの女の子4、5名が友達を観客として集め、アイドルのコンサートや握手会のごっこ遊びをしていた。その遊びがとても盛り上がったため、お昼の好きな遊びの時間にもアイドルごっこをすることが決まっていた。お昼になり、女の子たちは参加することができず、昼からもすることを知ったため、女の子たちに「入れて」と言いに行った。しかしアイドルごっこの準備で忙しくしていたため、断られてしまい、仕方なく泣きながら帽子をかぶり、外へ遊びに行こうとしていた。

私はDちゃんが将来アイドルになりたいということを知っていたため、③その子の姿を見て耐えられず声をかけた。その後Dちゃんの気持ちを聞き、アイドルごっこをしている女の子の元へ、もう一度一緒に行ってみようと思った。すると、一人の女の子に「Dちゃんはだめ」と言われたので、「どうしてだめなの？」と理由を聞くと帽子をかぶっているし、女の子たちがつけている紙で作ったリボンをつけていないからということだったので、女の子に言われた通り準備をしアイドルごっこに参加することができた。しかし、アイドルごっこの準備に時間をかけすぎてしまったため、コンサートが始まった頃には場が混乱しており、Dちゃんは一生懸命踊ろうとしていたが、男の子に邪魔をされ思うように踊ることができず、終わった後も泣いていた。

〈考察〉

Dちゃんはアイドルになりたいという夢があり、いつもアイドルになりきって遊んでいたのだから、女の子たちのアイドルごっこに参加したいのだろうと感じていた。そこで④いつもは1人で遊ぶことが多いのに勇気を出して「入れて」と言いに行ったが断られてしまい泣いていたDちゃんの姿を見てたまらず声をかけた。しかし、アイドルごっこをした後も泣いていたので楽しい時間を過ごすことができなかつたり、友達と遊ぶ楽しさを味わうことができなかつたのではないかと思う、⑤声をかけたのは間違いだったのではないかと思った。また最初にアイドルごっこをしていた女の子たちの気持ちも聞いていなかったため、Dちゃんと女の子たちの両方の気持ちを大切にしておくことが大切だったと感じた。

エピソード2は、書き手である学生の思いがよく描かれた記述である。下線部③の「その子の姿を見て耐えられず声をかけた。」や、下線部④の「いつもは1人で遊ぶことが多いのに勇気を出して「入れて」と言いに行ったが断られてしまい泣いていたDちゃんの姿を見てたまらず声をかけた。」からは、学生の居ても立っても居られないというような思いが読み手に伝わってくる。

また、下線部⑤の「声をかけたのは間違いだったのではないかと思った。」という部分からは、仲間に入れないDちゃんに心を寄せると同時に、Dちゃんに対する自分の関わりが良かったのかを改めて問い直している。このエピソードからは、書き手である学生はDちゃんに関わる「私」の心の動きに丁寧に向き合い、自分自身をさらけ出しエピソードを記述していることが分かる。

(3) 主観的な私としての捉え

エピソード3

タイトル：心地よさ

〈背景〉

Cくんは3歳の男児である。とても活発で明るく友だちも多い。まだ自分の気持ちを言葉で上手に表現することは難しいが、人前に出ることが好きな男児である。以下は、子どもたちと一緒に動物のクイズをした後、歌をうたう際のCくんの姿である。

〈エピソード〉

幼稚園実習で3歳児クラスに入り指導実習を行ったときのことである。

私が指導者という立場で保育を行っており、最初に動物の鳴き声クイズを子どもたちとしていた途中で、Cくんがいきなり皆の前に立ったのである。何をするのかと見ていると、「みんなの広場」の歌をうたい始めた。最初は私も子どもたちも戸惑っていたけれど、Cくんが真剣に歌っている様子を見て、皆も一緒になって歌い始めた。

歌い終わったときには皆が笑顔になっていて、Cくんもほめると満足そうな顔をしていた。

〈考察〉

自分の指導で動物の鳴き声クイズをしてから、「みんなの広場」に歌を歌うという流れだったけれど、前にも同じような流れがあったことを子どもたちは覚えており、先を読まれてしまっていた。Cくんもクイズの後には歌をうたうから、皆の前に出て歌ったらおもしろいんじゃないかと思い、前に出て歌ってみようと思ったのではないかと思う。Cくんが前に出て歌い出したのを他の子どもたちが見て歌い出したときには、⑥時間がゆっくりと流れている感じがして、心地よかった。

⑦心地よさを感じたということは、少なからず他の子どもたちや保育者も感じていたと思う。保育をする上で良い雰囲気を作るといことはとても大切だと学んだし、子どもとの関わりの中で考えながら保育を進めていくことも大切だと分かった。

指導では、子どもたちに次の活動のドキドキ、ワクワク感を感じられるような保育は出来なかったけれど、Cくんの活躍で良い雰囲気の中で、一体感を感じられたのは良かったと思う。声かけや活動内容を工夫しながら、良い雰囲気づくりをしていきたいと思う。

エピソード3では、指導実習を行ったときの子どもの意外な姿に心を動かされた場面が描かれている。下線部⑥は、その場の雰囲気が身体感覚として記憶されており、それが「時間がゆっくりと流れている感じがして、心地よかった。」という言葉で表現されたのだろう。

また、下線部⑦の「心地よさを感じたということは、少なからず他の子どもたちや保育者も感じていたと思う。」という言葉からは、客観的な保育者としての捉えではなく、主観的な私としての

捉えで、保育を振り返っていることが分かる。時間がゆっくりと流れている、心地よいという言葉は、決して客観的な言葉ではなく、本当に他の子どもたちや他の保育者が同様に感じていたかは分からない。しかし、他の誰でもない私を感じたこととして描かれることで、ある種の確からしさが浮かび上がってくる⁶⁾ エピソードである。

3. エピソード記述作成について学生の感想

全授業の最後にエピソード記述を作成した感想を以下のように書いた。

- ① 自分のしたこと、されたこと、子どもの行為の意味を保育中には考えることができず、自分のことで精一杯になってしまうが、このように文字にし振り返り記録することで、どこを改善すべきなのか、子どもの気持ちに自分がなってみてどう思うのか、あの時の関わり方でよかったのだろうか、などを考えることができた。
- ② 自分の気持ちを書くことで、その時の自分に足らなかったもの、伸ばしていくこと、子どもの気持ちなどを改めて考えることができると思った。
- ③ 人に見てもらい、改めて書き直すことで、自分の思っていることが上手く伝わっているかどうか、人との意見の違いなどに気づくことが増え、自分のものになると思った。
- ④ 心が動く出来事ということで、何かしら自分の心に響く何かがあると感じていると思う。その何かを探すということも楽しいと思った。

①の感想からはエピソード記述を作成することで、自身の保育を振り返り、新たに捉え直しができたことが分かる。さらに②では「私」の気持ちを書くことが保育の捉え直しがつなぐたと書かれている。また③からは人に見てもらおうということによって気づきを得ることができたということ、④では心の動きを書くことで保育記録の楽しさを感じることに繋がったと述べられている。

Ⅲ. おわりに

以上学生が作成したエピソード記述を紹介した。これら3つのエピソードは、エピソード記述であるからこそ見えてきた子どもの姿や学生自身の心の動きがある。また、エピソード記述作成の感想からは「私」という主観的な思いを交えて書いたことによって、保育の捉え直しがなされたり、保育を言語化する楽しさを感じたようであった。

先述したように、エピソード記述は従来の記録物とは異なり、固有名をもった保育者（学生）が一個の主体として子どもとの関係を生きた場面の記録である⁷⁾。実習での経験を単なる事実経過として記録すれば、そのときその瞬間の子どもの思いや学生の思いは見えてこない。エピソード3のように他の誰でもない「私」の感覚で保育実践を捉えることで、学生が描く保育実践がある種の確からしさを持って読み手に伝わる。本実践では敢えて「私」の感情を入れて書くということを学生が意識することで、自分自身の心の動きに向き合い、ありのままの姿を描くことができたのではないだろうか。

保育を言語化することは保育の質や専門性向上につながっていくことであり、保育者としてまた研究者としても求められていることである。一方で、記録を書くということは学生によっては難しいと感じるものであり、負担なことでもある。それは現職保育者や研究者にとっても同様である。本実践では、「私」の思いを交えて記述することで、書くということや振り返るということの面白さを実感した学生もいた。このように、子どもの姿や子どもとの関わりを誰かに思わず伝えたくなっ

たり、書くということを通して振り返ることが楽しいという思いを基に保育を言語化するということが重要ではないだろうか。

しかし、全ての学生においてこのような自分自身の心の動きが描かれていたわけでない。学生によっては他の実習先の保育者や他の実習生の動きを書くことはできても、自身の思いを描くことに難しさを感じる者もいた。また、2回目の授業時にエピソード記録を書き直すという作業を入れたため、また書かなければいけないという意識が働き、保育記録に関してさらにネガティブな印象を持った学生もいたと考えられる。本実践ではどちらかと言えばエピソード記述を作成することに重点を置いていたため、今後はエピソード記述をグループで読み合うという経験も充実させていきたい。さらには自分の思いを描くことに難しさを感じるということは、どのようなことであるのか、学生のエピソード記述や気づきから考えていきたい。

引用文献

- 1) 鯨岡峻 (2005) エピソード記述入門 ―実践と質的研究のために. 東京大学出版会
- 2) 鯨岡峻・鯨岡和子 (2007) 保育のためのエピソード記述入門. ミネルヴァ書房
- 3) 鯨岡峻・鯨岡和子 (2009) エピソード記述で保育を描く. ミネルヴァ書房
- 4) 岡花祈一郎 (2013) エピソード記録. 小田豊・山崎晃 (監). 幼児学用語集. 北大路書房. 114
- 5) 岡花祈一郎 (2009) 「エピソード記述」による幼児理解に関する研究：保育内容言葉との関連を中心に. 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要. 37 (3). 229-237
- 6) 大倉得史 (2013) 乳児の体験世界に〈他者〉はいつ登場するのか：質感的研究の可能性. 質的心理学フォーラム. 5. 13-23
- 7) 鯨岡峻 (2009) エピソード記述を通して保育の質を高める. 保育学研究. 47 (2). 237-238